



—誰でも読めるシリーズ—



『パイドン』



プラトン

大庭好喜

## まえがき

現在、あふれかえるほどの本が出版されています。ドキュメンタリー・小説・随筆・伝記などジャンルはさまざまです。また、日本人が出版したもの、外国人がその母国語で出版したもの、また、つい最近刊行されたもの、書かれて1千年以上が経過するものなどいろいろです。

ところで、芥川賞・直木賞などを受賞した作品には、何百万部も売れ、ベストセラーにもなるものもあります。現代の日本のこれらの作品を読み感動することはすばらしいことだと思います。一方、長い時代をとおして人々に読まれ続けてきた「世界の名著」と呼ばれるものを手に取り読むこともまた大事なことだと思います。「世界の名著」といえば、学生時代に世界史や倫理の授業で著者と作品名を覚えたことを思い出す人もいらっしゃるでしょう。例えば、ダンテの『神曲』、ボッカチオの『デカメロン』やギリシャ思想のところでは、プラトンの『ソクラテスの弁明』や『饗宴』などがそうです。しかし、これらの本を実際に読んだことのある人はどれぐらいいらっしゃるでしょうか。今でも著者とタイトルは覚えているが、その内容は全然分からないという人がほとんどではないでしょうか。無理もないことだと思います。仮に書店の訳本コーナーでそれを見つけて、ページをめくってみても、その内容が分かりにくく面白く読み進んでいけないからです。翻訳者が原文に忠実に翻訳しようとして、訳本の内容をかえって複雑にしまったり、専門的訳語を使うことにこだわったりするために、一般の読者が読むにはあまりにも難解な訳本に仕上がってしまっているからです。語学に習熟して原文を直接読める人は、原文では理解できるのに訳本となるとかえって分かりづらくなるという話を聞いたことがあります。

そこで私は、著者の本の内容をできる限り変えずかつ大胆に、われわれが通常耳にする日本語を使い、簡単に読める内容に改めました。完訳本を読んだと同じぐらいの理解と満足感を短時間で得られるように努めました。通勤・通学の電車の中でも気楽に読め、頭に入るものをめざして書きあげました。まずは、読むことによって、過去の偉大な思想家の著書に直接ふれてそのすばらしさを味わっていただきたいと思います。―誰でも読めるシリーズとして順次刊行していきますので、どうぞ手に取ってお楽しみいただければ幸いです。

(エケクラテス) :

「パイドン、ソクラテスが毒杯を飲んだ時に、あなたはその牢獄にいたのですか。それとも、そこにはおらず、その時の様子を誰かから聞いたのですか」

(パイドン) :

「私自身がそこにいました」

(エケクラテス) :

「それなら、あの方が死の前にどのようなことを話されたのか、どのような様子だったのかを教えてください」

(パイドン) :

「はい。ところで、裁判の状況はどうであったかご存じですか」

(エケクラテス) :

「それは知っています。ただ、死刑判決が出てから毒杯をあおるまで結構長い期間があったのはなぜですか」

(パイドン) :

「それは、ちょうど、彼の判決が決まる前日にアテネの人々にとってひじょうに大切なお祭りが始まったからです。これは結構長期間行われるのですが、この期間中は国を清浄に保つために処刑は行ってはならないと決められていたからなのです」

(エケクラテス) :

「わかりました。それでは、ソクラテスが毒杯をあおられた時の状況を詳しく教えてください」

(パイドン) :

「その時は、ソクラテスの周りには多くの人々が集まっていました。驚くべきことに、私はその場において全くと言っていいほど、悲しい気持ちには襲われませんでした。なぜなら、その時の言葉や態度から、あの方はひじょうに幸福そうに見えたからです。ただあの方とお話しをして、日頃感じるような楽しい気持ちも起こりませんでした。全く何か奇妙な感情にとらえられていました。それは、喜びと苦しみが入り混じった複雑な思いでした。そこに集まった者たちも私と同じ感情だったと思います。ある時は笑い、ある時は泣いていました。それと、プラトンは病気で、そこには来れなかったと記憶しています」

(エウケラテス) :

「それでは、そこでのその時の議論の様子を教えてください」

(パイドン) :

「わかりました。最初からできる限り詳しくお話ししましょう。彼が牢獄に入ってからというもの、われわれは毎日のように門が開く前から集まり、開門同時に彼のところに行き、たいていは一日中をそこで過ごしていたのです。ただ、処刑の日は、いつもより早くそこに集まりました。間もなくして、門番が出てきて、「今、刑務官がソクラテスに、本日、刑を執行することを伝えているのでしばらく待つように」と言いました。その話が終わったので門番は、われわれを中に招き入れました。そこには、ソクラテスと妻のクサンチッペと彼の子どもたちがいました。クサンチッペは、われわれを見るなり大声で「この親しい方々があなたに話しかけ、あなたがこ

の方々に話しかけるのもこれが最後なのですね」と泣き叫びました。ソクラテスは、「誰か妻を家に連れて帰ってくれ」と頼まれたので、何人かが彼女を連れて出ていきました。ソクラテスはベッドの上に起き上がり、足をさすりながら話を始めました」

(ソクラテス) :

「快と苦痛は不思議な関係にあるな。両者は全く反対なものなのに、一方がやってきたあとに、すぐにもう一方がやってくるね。まさに今のぼくがそうだ。足枷につながれていた時には足にずっと苦痛があったけど、それがほどかれるやすぐに快さがやってきたよ」

すると、その場にいたケベスが口を開いた。

(ケベス) :

「あなたは以前は詩などつくられることはなかったのですが、ここに来られて何作もつくられております。ある友人からもなぜソクラテスが詩作を始めたのか聞いてくれと頼まれています。どうかその理由を教えてください」

(ソクラテス) :

「それは、夢がぼくに「文芸活動をせよ」と命じたからなのだ。以前からもこの夢は見えていたのだが、今まではそれは「哲学をせよ」ということだと解釈していた。しかし、死期がせまるにつれてそれは、詩をつくりそれを残せと言っていることだと解釈するようになったからなのだ。真実を追求することも大事だが、創作することもまた重要なことだと考えるようになったのだ。このように君の友人にも説明しておいてくれ。それとその友人に、あなたも哲学者なら早く私の後を追うようにとも言うておいてくれ」

すると、シミアスが言いました。

(シミアス) :

「ええ、あなたはケベスに、友人に対してソクラテスのあとを早く追いなさいと言えとおっしゃるのですか。そんなことに彼の友人が従うとはとても思われません」

(ソクラテス) :

「なんだって、ケベスの友人というのは哲学者ではないのか」

(シミアス) :

「哲学者だと思います」

(ソクラテス) :

「哲学者であればぼくのすすめに従おうと思うよ。ただ、自殺はしないだろうな。なぜなら、自殺とは一般には人間にとっては許されないことだとされているからだ」

そこでケベスが尋ねました。

(ケベス) :

「それはどういう意味ですか。一方では、自殺は許されないとわれながら、他方では、哲学者は喜んで死ぬもののあとを追えなどと言われるのは理解できません」

(ソクラテス) :

「それなら話してあげよう。これは私もある人から聞いた話だけだね。今日夕方、死へと旅立つ私があの世界への旅路がどんなものだと考えているかを語っておくことは、多に意味のあることだと考えているからな」

(ケベス) :

「はい、お願いします。それでは、自殺は許されないことだと今までいろいろな人から聞いてきましたが、誰からもその明確な理由を聞いたことがありません。是非それから教えてください」

(ソクラテス) :

「まず、不思議に思うかもしれないが、前提として人は生きることよりは死ぬことの方が誰にとっても無条件的に善い事だということを言っておきたい。ただ、自殺が許されないのは、人間は自分自身でその善い事をしてはならないからである。他者がしてくれるのを待たなければならないということなのだ。不条理ように思われるかもしれないが、これには根拠がある。われわれ人間は、生きるという牢獄の中にいるが、そこから自分自身を解放して逃げ出してはならないのである。なぜなら、われわれ人間は、神々の所有物の一つなのだからだ。たとえば、君の所有物の一つが、君がそれを望んでもいないのに勝手に死を選んだらそれに腹を立てるし、もし罰則が与えられるなら、その所有物に対して罰を与えようと思うだろ」

(ケベス) :

「はい、そうです」

(ソクラテス) :

「つまり、われわれの眼前に神が死というものを何らかのかたちで、お贈りになるまでは、自分自身を殺してはならないということだ。つまり、それが自殺が許されない根拠なのだ」

(ケベス) :

「はい、それは分かりました。しかし、哲学者は喜んでできる限り早く死のうとすべきだという点は理解できません。なぜなら神は、哲学者こそ、最も長く生きて自分のもとにいてほしいと思うのではないですか。彼らが神のもとを早く立ち去ることを望んでいるとしたら、神は、ひじょうに憤慨されるのではないですか。また、思慮分別のない人間なら、自分を監視する神のもとから早く逃れたいと思うかも知れませんが、哲学者は、自分より優れた神のもとにできる限り長くいたいと考えるのではありませんか。そうすると、あなたの言われたこととは反対に、思慮のある者たちが死に対して憤慨し、無思慮な者たちが死を歓喜するのではないですか」

(ソクラテス) :

「ケベス君はいつもぼくのいうことをすぐに信じようとしなないね」

すると、今度はシミアスが会話に加わりました。

(シミアス) :

「いや、ソクラテス。ケベスの言っていることは間違っていないのではないですか。知恵のある人々が平気で神のもとを離れるとは思えないのです。それとケベスは、あなたのことも言っているのではないかと思います。なぜあなたがわれわれや神のもとを平然として離れようとしているのかと問うているのではないですか」

(ソクラテス) :

「シミアス君にケベス君、確かに君たちの言おうとすることは理解できる。しかし、死んだら私はこの世を支配する神々とは別のさらに賢くて善い神々の所へ行くということ、また、この世の人々よりはより優れた死んだ人々のところへ行くということを感じているからなんだ。だからぼくは、それを信じることができない人々と同じように死に際して憤ることがないのだ」

(シミアス) :

「ソクラテス、あなたはその確信を自分だけが持って死に至られるのでしょうか。もしそれが真実であるなら、われわれが死に至る場合も同じはずです。どうかそのことをわれわれも確信できるよう説得してみてください。それが同時にあなた自身の今の状況にわれわれが納得できることにもつながるはずです」

(ソクラテス) :

「わかった。それじゃあ試してみよう。ただ、さっきからクリトン君が何かを言いたがっているので、ちょっと聞いてみようではないか」

(クリトン) :

「ひじょうに言いにくいのですが、あなたに毒薬を飲ませる役目の男が、ソクラテスとあまり会話をしないでくれと言っているのです。話すことでソクラテスの体が熱くなると薬の効きが悪くなり、薬が2倍も3倍もいるそうなのです」

(ソクラテス) :

「その男はほっとけばいいではないか。2倍でも3倍でも毒を作らせればすむことではないか」

(クリトン) :

「ぼくもそう思うのですが、彼があまりにもしつこいものですから一応、伝えておきたかっただけです」

(ソクラテス) :

「それでは、始めよう。真に哲学者といえる者は、死ぬこと、死の状態にあること、それだけをいつも願っているのだ。そのように死を望んできた人間が、いざ実際に死がやってくるときに、それに対して憤慨するということは全く馬鹿げたことであるのではないか」

(シミアス) :

「笑うつもりなどないのですが、多くの人は哲学者とは死んだも同然の生き方をしている人間だと思っていますから、そのことに多分、納得するのではないかと思います。またそれがふさわしいと哲学者自身も分かっているんじゃないかと思います」

(ソクラテス) :

「確かに君の言うことは当たっている。ただ、哲学者もどのような死が自分にふさわしいかなど

は分かってはいない。それはそれとして、死がわれわれにとってどのようなものであるかを考えていこう」

(シミアス) :

「はい、分かりました」

(ソクラテス) :

「それでは始めよう。死とは、魂と肉体の分離だよな。魂と肉体が単独のものとなることだな」

(シミアス) :

「そのとおりです」

(ソクラテス) :

「ところで、哲学者は食べることなどの快楽を熱心に追求する人間であるだろうか」

(シミアス) :

「いいえ、そのような人ではありません」

(ソクラテス) :

「それでは、性の快楽についてはどうだろうか」

(シミアス) :

「問題外のことです」

(ソクラテス) :

「彼らは、その他、体に関わること、たとえば豪華な洋服を着たり、きれいな靴をはいたりすることを尊重するか、それともそれらは最低限満たされていけばそれでよしとし、むしろそれ以上のものを持つことを軽蔑するかい」

(シミアス) :

「本当の哲学者なら軽蔑すると思います」

(ソクラテス) :

「それなら、一般にこのような人々の仕事は、肉体に関することではなく、魂に関することで、彼らの関心も魂の方にあると考えていいかな」

(シミアス) :

「そのように思います」

(ソクラテス) :

「つまり、哲学者とは、他の人々とは違い、できるだけ魂を肉体との交わりから解放する者であると言えるのではないかな」

(シミアス) :

「明らかにそうです」

(ソクラテス) :

「ところが、一般の多くの人々は、肉体的なものを快いと思わず、そういうものに関わろうとしない者は、生きるに値しない、死んだも同然の人間であるとみなすのではないかな」

(シミアス) :

「そのとおりだと思います」

(ソクラテス) :

「では、知恵を得るには肉体は邪魔なのか。そうではないのか。見ること、聞くことは人々に真実を教えてくれるのか。ましてやそれよりも感覚的に劣った器官がわれわれに真実を教えてくれるとでもいうのか」

(シミ阿斯) :

「肉体は真理を伝えることはできないと思います」

(ソクラテス) :

「肉体と協同して魂が何かを考察しようとするとき、魂が肉体に欺かれるなら魂は、いつどのようにして真理に触れることができるのか。もし、真理に到達するときがあるとすれば、それは思考の過程においてではないだろうか」

(シミ阿斯) :

「そうであろうと思います」

(ソクラテス) :

「そして、その思考が最も研ぎ澄まされるのは、聴覚や視覚または苦痛や快楽などの肉体的なものから離れたときではないか。つまり、魂が肉体に別れを告げて、可能な限り肉体と交わりを断ったときではないか」

(シミ阿斯) :

「そのとおりです」

(ソクラテス) :

「つまり、哲学者の魂は肉体を嫌い、そこから離れようとし、肉体のない自分になろうとしていると言えるな」

(シミ阿斯) :

「そのように思われます」

(ソクラテス) :

「ところで、シミ阿斯。正義とは存在するのかもしれないのか」

(シミ阿斯) :

「存在します」

(ソクラテス) :

「それでは、善や美は存在するのか」

(シミ阿斯) :

「当然、存在すると思います」

(ソクラテス) :

「それでは、これらのものを君は今まで目で見たことがあるかい」

(シミ阿斯) :

「いいえ、ありません」

(ソクラテス) :

「それでは、目以外の肉体の器官がそれらを把握したことがあるかい。もっというなら大きさ、

健康、力などその他すべてのことについても、これらの本質というものを目で見たり、肉体の器官で把握できたことがあるであろうか。これらの本質について知るには、思考・考察で接近する以外にはないのではないか」

(シミアス) :

「まったく、そのとおりです」

(ソクラテス) :

「これらの本質そのものを把握するには、人は魂による思惟そのものでそれらのものに向かい、その過程で感覚に引きずり込まれないようにし、純粋な思惟それのみを用いて追究する。つまり、魂ができる限り肉体から解放されるように努めるのではないか」

(シミアス) :

「まさにそれが真実です」

(ソクラテス) :

「それで、真の哲学者は次のように考える。肉体をもち、魂がそれに影響を受けている限り、われわれは、自身が望む真実には到達できない。肉体を養うためにわれわれはいろいろな厄介を身に受けねばならないのである。病になれば真実の探究をそれが妨害するし、愛欲・欲望・恐怖もそれを妨げる。戦争などの争いも肉体の欲望がもたらす。なぜならそれらは財貨の獲得を目指すからである。肉体を養うためにわれわれには財貨が必要なのである。これらによりわれわれは哲学するゆとりを失うのである。仮に真理の探究に向かったとしても、途中で肉体により引き戻されてしまうのである。ゆえに、純粋に物事を知ろうとすればわれわれは肉体から離れなければならないのだ。それにより、真の知恵者となることができる。つまり、それは死んだ時を意味するのである。生きている間に知恵者になることは決してきないのである。生きている間にそれに近づくためには、われわれはできる限り肉体との交わりを避け、清浄な状態を保つ必要がある。そしてそれに最も近付いた時、清浄な真理に最も近付くのである。私はそう思うがシミアス君はどうかね」

(シミアス) :

「私もそう思います」

(ソクラテス) :

「もしこのことが真実なら、私が今から行くところへ到達した者には大きな希望があるのだ。われわれがこれまでの人生で獲得しようと追究してきたものが手に入るかもしれない希望の場所だ」

(シミアス) :

「そのとおりです」

(ソクラテス) :

「つまり浄化とは、魂をできる限り肉体から切り離し、この足枷となっている肉体から魂を解放し、できる限り魂だけで単独に生きられるようにすることだな」

(シミアス) :

「そのとおりです」

(ソクラテス) :

「そして、この魂と肉体の完全な分離こそが死ではないのかね」

(シミアス) :

「全く、そのとおりです」

(ソクラテス) :

「魂の解放を常に望んでいるのは正しく哲学をしている人だけである。哲学者の仕事とは魂を肉体から分離させ解放させることだな」

(シミアス) :

「そうだと思います」

(ソクラテス) :

「それでは、できるだけ死に近い状況にしようと努めてきた人間が、いざその死がやってこようとした時に憤慨するとはおかしいことではないかね」

(シミアス) :

「確かに、滑稽なことです」

(ソクラテス) :

「死の練習をしてきた哲学者がもし、死を恐れ、それに対して憤慨するとしたら、全く不合理なことではないかね。あれほど求めていた、あの世へ行くということが実現しようとしているのに、喜ばないことなんてありうるはずがない。本当の哲学者とはそのように考えるのではないか」

(シミアス) :

「そのとおりです」

(ソクラテス) :

「そうだから、ある人がまさに死に直面して、怒り嘆いているなら、その人は哲学者ではなく肉体を愛する者であったということになるのではないか。つまり、金銭や名誉を愛する人なのだ」

(シミアス) :

「そのとおりです」

(ソクラテス) :

「勇気とか節制は哲学者が求めているものではないか」

(シミアス) :

「そうです」

(ソクラテス) :

「哲学者以外の人々の考える勇気や節制とはいささか奇妙なものだとは思わないかい」

(シミアス) :

「どうしてですか」

(ソクラテス) :

「哲学者以外の人々は、死を大きな災難の一つと考えていることには、君も納得するね」

(シミアス) :

「もちろんです」

(ソクラテス) :

「それでは一般の人々の中の勇敢な人が死を耐える時は、死よりもより大きな災難をこうむるぐらいなら、まだ死んだほうがましだと考えて死の恐怖に耐えるのだね」

(シミアス) :

「はい、そのとおりです」

(ソクラテス) :

「ということは、人は恐怖によって勇敢になれるのである。これは不合理なことのようと思われるが、そうではないか」

(シミアス) :

「そう言われれば、そういうことになります」

(ソクラテス) :

「節制についても同じことが言えるのではないか。放縦したいがゆえに節制をするのではないか。つまり、人はより大きな快楽を失うのを恐れ、目の前のささいな快楽を我慢するのではないか。それは、快楽を得ようとすることに支配されているうえでの節制にすぎない。彼らは、放縦したいがために節制するのである。不合理ではないか」

(シミアス) :

「はい、そのようです」

(ソクラテス) :

「快楽と快楽を交換し、苦痛と苦痛を交換するというのは、徳を得るための正しい道ではないのではないか。知恵をもとにこれらのものが判断されなければそれは徳とはいえない。節制・正義・勇気などは知恵により浄化されたものでなければならない。私は、人生において何事もおろそかにせず、あらゆる手段で努力してきた。それが正しかったかどうか、何事かを成し遂げてきたかどうかは、もうすぐ向かうあの世界で明らかになる。シミアス君・ケベス君これが私の言いたかったことだ。私は、この世の君たちやこの世の神々と去らなければならないことに苦しみも嘆きもない。あの世でも善い友達や神々に会えると信じているからだ」

今度はケベスが言いました。

(ケベス) :

「あなたの言われることは良くわかりました。しかし、多くの人々は、魂は肉体から切り離されると煙のように消えて滅び去ってしまうのではないかと思っているのです。魂が死後も存在し続けるということについては、もう少し明確な論理と証明が必要なのではないでしょうか」

(ソクラテス) :

「君のいうとおりだ。このことについてもう少し話をしよう」

(ケベス) :

「是非お願いいたします」

(ソクラテス) :

「私は言論をもてあそぶようなことはしない。徹底的に考察していこう。昔からの言い伝えに、死んだら魂はあの世に行き、しばらくそこで過ごし、再びあの世からこの世に到来し、新たな人間に宿り生まれ変わるといふものがある。これが真実だとするならば、われわれの魂は、死後もしばしの間あの世に存在するということになる。なぜなら、あの世に存在しないとしたら、新たな肉体に生まれ変わるなどないからだ。それゆえ、もし生きている者たちが死んだ者たちから生まれてくるのが明らかになれば、魂が死後あの世に存続することが証明できるはずだ」

(ケベス) :

「そのとおりです」

(ソクラテス) :

「ではこのことは人間だけではなく動物・植物にもあてはまることなのか、さらにおよそ生起するすべてのものもそのようにして生じるのなのかを考察していこう。考えるに、およそすべてのものは反対のものからしか生じないのではないか。美は醜から、正は不正から。そのほかにもたくさん例をあげることができる。当然逆の場合もある。また、たとえば何かより大きくなる時は、必ず以前により小さな状態があって、そこから後に大きくなったのではないか」

(ケベス) :

「そのとおりです」

(ソクラテス) :

「同様に、それが小さくなるならば、以前のより大きな状態から後により小さくなったはずだ」

(ケベス) :

「そのとおりです」

(ソクラテス) :

「このようにまた、より強いものから弱いものが生じ、より遅いものから速いものが生じるのだな」

(ケベス) :

「まったくそのとおりです」

(ソクラテス) :

「では、何かより悪くなるならば、それはより良い状態からで、より正しくなるならより不正な状態からではないか」

(ケベス) :

「そうです」

(ソクラテス) :

「すべてのものは、反対のものがそれとは反対のものから生起するということに納得したということではないか」

(ケベス) :

「たしかに」

(ソクラテス) :

「次に、この生起には二つの相対するものがからむのでその仕方は二通りあるな。例えば、大か

ら小へという生起と小から大への生起という二種類のものがあるということだ」

(ケベス) :

「はい」

(ソクラテス) :

「このことは、分離と結合、冷と熱など現実にはあらゆるところで見られることだな」

(ケベス) :

「そのとおりです」

(ソクラテス) :

「目覚めている状態の反対が眠っている状態である。それなら、生きていることに対する反対のものとは何かね」

(ケベス) :

「死んでいることです」

(ソクラテス) :

「それでは、この生と死は反対のものであるから、相互から生ずるものだな。二種類の生成があることになるな。つまり生から死が生まれ、死から生が生まれるのだな」

(ケベス) :

「そういうことになります」

(ソクラテス) :

「それならもう一度君に聞くが、生きているものから生ずるものは何かね」

(ケベス) :

「死んでいるものです」

(ソクラテス) :

「それでは死んでいるものからは何が生ずるかね」

(ケベス) :

「生きているものと言わざるをえません」

(ソクラテス) :

「つまり、死んでいるものから生きているものたちや生きている人間が生まれるのだね」

(ケベス) :

「そう思われます」

(ソクラテス) :

「それならわれわれの魂は、あの世に存在していることになるな」

(ケベス) :

「そのようです」

(ソクラテス) :

「それでは今度は生と死の生成過程について考えてみよう。ただ、生から死が生成されることは明白であるね」

(ケベス) :

「はい」

(ソクラテス) :

「それでは逆に死から生への生成過程とはどのようなものかね」

(ケベス) :

「死者が生き返るということです」

(ソクラテス) :

「生き返るということは、死んだものの魂はどこかに存在し続けなければならないということの十分な証明となるな」

(ケベス) :

「今までの話の流れからはそのようになります」

(ソクラテス) :

「そしてもしも、この生成が一方から他方へそしてまたその前のものに戻るという円環的なものではなく、向きを変えることのない直線的な一方向的なものなら、万物はやがてはすべて同じもの、同じ状態となり、生成することをやめてしまうよな」

(ケベス) :

「どういう意味ですか」

(ソクラテス) :

「別にむずかしいことではないよ。人は眠りには入るが目覚めるということがなければ、この世は眠った人だけの世の中になってしまうのではないか。また、すべてのものが結合はするが分離はしないというならこの世のものは一塊になってしまう。生者が死ぬだけならこの世は死者だらけになる。また、もし生者が死者以外から生まれるとしたら、万物はいつかは消費し尽くされてしまうのではないか。それを防ぐ手段でもあるのかい」

(ケベス) :

「いいえ、ありません」

(ソクラテス) :

「生き返るということも生者が死者から生まれることも、死者の魂が存在することも事実なのだ」

(ケベス) :

「確かにソクラテス、いつもあなたは、われわれが学習するというのは、実は思い出すことであると言っておられます。これが真実なら、思い出したことを以前どこかで学んでいなければなりません。それならこの魂が現在の肉体に入り込む前にどこかに存在していなければなりません。このように考えると魂とは不死なものであると思えてきます」

するとシミアスが口をはさんだ。

(シミアス) :

「確かその証明もなされたはずです。どのように証明されたかは思い出せないから、もう一度確

認したいものです」

(ケベス) :

「最も納得できる証明は、人が上手に質問するならそれに対して誰でも真実とはどうであるかを自力で答えることができるということであったと思う。それは、人があらかじめそれに関する知識や正しい認識を持っているからであるという。事実、ある召使いが幾何学の証明を自力で成し遂げたという例も聞いたことがある」

(ソクラテス) :

「シミアス君、ケベス君、二人の話ではまだ納得できないのなら、どのようなことが説明されれば納得できるのか言ってくれ」

(シミアス) :

「いいえ、信じていないというわけではありません。ただ、私はその思い出すということを実際に自分で経験してみたいのです。また、その証明についてソクラテスあなた自身の口からもう一度聞きたいのです」

(ソクラテス) :

「分かった。それでは始めよう。もし誰かがあることを思い出したとしたならば、それはそのことを彼は以前に知っていたのでなければならぬ」

(シミアス) :

「もちろんそうです」

(ソクラテス) :

「それでは、もし誰かが何かを見たり、聞いたりあるいは別の感覚でとらえた時、その対象を認めるだけでなく、他の別のものを思い浮かべたとしたら、この両者には同一でなく別の知識が存在するのだから、この思い浮かべた別のものは、思い出したものであるということになるのではないだろうか」

(シミアス) :

「どういう意味でしょうか」

(ソクラテス) :

「たとえば、人間に対する知識と豎琴に対する知識は別のものだね」

(シミアス) :

「もちろんです」

(ソクラテス) :

「それなら、ある女性が豎琴を見ることによって、いつもそれを用いて演奏を行っていた、あこがれの青年を思い浮かべたとする。これが思い出すということなのだ。またシミアス君を見てその友人であるケベス君を思い浮かべるようなことだ。このような例はいくつもあるだろう」

(シミアス) :

「はい、無数にあります」

(ソクラテス) :

「それが思い出すということではないかね。特に、すっかり忘れていたことに、ある別の物を見

て気づき考える時なんかがそうではないかね」

(シミアス) :

「はい、そのとおりです」

(ソクラテス) :

「それではそのもの自体ではなく、描かれた豎琴でもって青年を思い出したり、シミアス君の似顔絵を見てその友人であるケベス君を思い出すこともあるのではないかね」

(シミアス) :

「はい、あります」

(ソクラテス) :

「それでは描かれたシミアス君を見て、シミアス君自身を思い出すこともありうるね」

(シミアス) :

「はい、あります」

(ソクラテス) :

「また、思い出すということは、似ているものを見て思い出す場合もあれば、似ていないものから生ずる場合もあるな」

(シミアス) :

「はい、そのとおりです」

(ソクラテス) :

「しかし、誰かが何か似ているものからあるものを思い出す場合は、思い出したものがその思い出すきっかけとなったものと似ている点についていろいろと考えたからだろうな」

(シミアス) :

「はい、考えたからだろうと思います」

(ソクラテス) :

「その時、われわれは両者に何か等しい点があると言うだろうね。ただ注意してくれよ。私が言いたいのは単に両者の姿・形などが似ているというような外面的等しさを考えたということを行っているのではないのだ。その両者が持つ、本質的な「等しさそのもの」という概念の事なのだ。シミアス君、このような「等しさそのもの」というようなものはあると思うかい。あるいは、ないと思うかい」

(シミアス) :

「私は、あると思います」

(ソクラテス) :

「そしてわれわれは、「等しさそのもの」が何であるかを知っているのかい」

(シミアス) :

「知っていると思います」

(ソクラテス) :

「ではこの知識はどこから得たのであろうか。それは、今まで話してきた事柄からではないであろうか。これらの現実にあるよく似ているものを見て、外面的なものではなく、本質的な概念と

しての「等しさそのもの」を考えるにいたったのではないかい」

(シミアス) :

「はい、確かにそうです」

(ソクラテス) :

「それでは、ある同じような石材を見てそれらがある人には等しく見えて、ある人には等しく見えないということがあのではないかね」

(シミアス) :

「はい、あると思います」

(ソクラテス) :

「それに対して、君が「等しさそのもの」というものが等しくなく見えたり、「等性」が不等なものとして見えたことが今まで一度たりともあるかね」

(シミアス) :

「決してありません」

(ソクラテス) :

「つまり、これらの等しいと思える事物と「等しさそのもの」は同一ではないね」

(シミアス) :

「はい、同一であるとは思われません」

(ソクラテス) :

「しかし、この等しいと思える事物から、それとは一見同じように思えるが、明らかに異なる「等しさそのもの」という知識・概念を考えつき、獲得したことになるな」

(シミアス) :

「はい、そういうことになります」

(ソクラテス) :

「その場合、思いついたものは、その機縁となったものに似ているか似ていないかのどちらかだね」

(シミアス) :

「そうです」

(ソクラテス) :

「だが、似ていようが似ていまいがどちらでもかまわない。要はこのものをきっかけとして何か別のものを考え付いたということが大事なのだ。それが思い出すということなのだ」

(シミアス) :

「そのとおりです」

(ソクラテス) :

「では、石材などの具体的なものや事柄は、「等しさそのもの」と同じように等しいのか、それとも等しさそのものより何か不足しているのかどちらだい」

(シミアス) :

「不足していると思います」

(ソクラテス) :

「では、誰かが「何か」を見て、その「何か」は別のものになろうと望んでいることが分かったとする。しかし、そのなろうとするものに対してその「何か」は劣っているためになることができそうにない。そのようにその「何か」を見た者が判断した場合、その「何か」がなろうとしたすぐれたものを、その人間はあらかじめ見て知っていなければならないはずだ」

(シミアス) :

「はい、そのとおりです」

(ソクラテス) :

「それと同じことを、われわれは等しい事物と「等しさそのもの」について経験しているのではないかね」

(シミアス) :

「はい、経験していると思います」

(ソクラテス) :

「つまり等しい事物が「等しさそのもの」になろうとするが劣っているゆえになれない。その時われわれは、あらかじめ「等しさそのもの」という概念を知っていなければならない。あらかじめとは、等しい事物が「等しさそのもの」になりたいと願うが、不足しているためになれないということをわれわれが認識する以前からだ」

(シミアス) :

「そのとおりです」

(ソクラテス) :

「また、「等しさそのもの」を考え付くのは、等しく思える事物を見たり、触れたりすることにより、生まれてきた感覚だよな」

(シミアス) :

「そうです」

(ソクラテス) :

「そういうことは、似ているなという感覚が生まれる以前に「等しさそのもの」に対する知識をどこかで得ていたのだからではないな」

(シミアス) :

「今までの話からするとそのようになります」

(ソクラテス) :

「さて、われわれは生まれるとすぐに、見たり、聞いたり、その他もろもろの感覚を用いたのでないか」

(シミアス) :

「そのとおりです」

(ソクラテス) :

「だが、われわれの主張では、それらの感覚を用いる以前に「等しさそのもの」の知識を得ていたのだからなければなかったわけだな」

(シミアス) :

「そうです」

(ソクラテス) :

「ということは、われわれは生まれる以前にそれらの知識を得ていなければならなかったことになるのだな」

(シミアス) :

「そう思われます」

(ソクラテス) :

「そして、その知識とは、「等しさそのもの」だけでなく、「大そのもの」「小そのもの」いやそればかりでなく「美そのもの」「善そのもの」「正義」などについても同じでなければならない。なぜならすべて「まさにそのもの」というものにみんな関わっているからだ」

(シミアス) :

「そうです」

(ソクラテス) :

「そして、その知識を持っているということは、それを知りながら生まれて、生涯それを知り続けているのでなければならない。だが、われわれが生まれる前に知識を獲得しながら、それを生まれるやいなや失ったとするならば、そして後にその知識の対象についての感覚を用いながら以前持っていた知識を再び把握するのだとしたら、学ぶとは再度把握すること。つまり想い出すということになるのではないかね」

(シミアス) :

「たしかにそうです」

(ソクラテス) :

「あるものを見たり、聞いたりして何か他の物を考え付くということは、それをわれわれは知りながら生まれてきてずっと認識していたか、あるいは、学んだといっているが実は想いだしたかのどちらかだ」

(シミアス) :

「そのとおりです」

(ソクラテス) :

「それなら、われわれは知りながら生まれてくるのか、それとも以前に知識を得ていた事柄をあとで想い出すのか、どちらかい」

(シミアス) :

「それはわかりません」

(ソクラテス) :

「何かを知っている人は、それについて説明できるかできないかどちらなのだ」

(シミアス) :

「当然できます」

(ソクラテス) :

「それなら今しがた議論していた事柄について、すべての人が説明できると思うかね」

(シミアス) :

「そうあってほしいです。しかし、明日の今頃になると十分にそれができる人もいなくなるのではないかと心配しています」

(ソクラテス) :

「シミアス君、すべての人がそれを知っているとは思わないのだね」

(シミアス) :

「はい」

(ソクラテス) :

「それでは、彼らはかつて学んだことを思いだすのだね」

(シミアス) :

「そうでなければなりません」

(ソクラテス) :

「それではわれわれは、いつその知識を身につけたのかね。生まれて以降なのか」

(シミアス) :

「以降ではありません」

(ソクラテス) :

「以前か」

(シミアス) :

「そうです」

(ソクラテス) :

「それならシミアス君。魂は生まれる前に肉体から離れてすでに存在し、知力ももっていたことになるのか」

(シミアス) :

「生まれると同時にその知識持ったのではないとすると、あなたの言われるとおりです」

(ソクラテス) :

「生まれると同時にその知識を得たとするなら、その知識をわれわれは、いつ失うのかね。君の言うことによると、持ちながら生まれるのではないから、獲得したときに失うのかね」

(シミアス) :

「いいえ、気づきませんでした。私は無意味なことを言ってしまいました」

(ソクラテス) :

「もし、いつも話続けているような「美」や「善」やすべてのそういった実在がたしかに存在し、かつそれらをかかつて自分自身が認識していたことを、今、感覚によって事物をとらえて、そこでそのものと関連付けて「美」や「善」との類似などを考察できるなら、「美」や「善」も存在しかつわれわれの魂も、われわれが生まれる以前に存在していたのでなければならぬ。もちろん、「美」や「善」やすべてのそういった実在が存在しないというなら、これらの話はすべて空しいものとなる。これらが存在するというなら、魂も生まれる前に存在し、存在しないという

なら、魂も生前に存在しないということになるのではないか」

(シミアス) :

「はい、両者の関連は必然だと考えます。私は、「美」や「善」などの本質が存在することは、全く疑っておりませんので、魂が生前に存在するという事は、自分にとって疑う余地のないこととなりました」

(ソクラテス) :

「ところで、ケベス君はどう思っているのかな」

シミアスが先に答えました。

(シミアス) :

「十分納得したのではないかと思いますよ。彼は議論に対してはひじょうに頑固な人間ではありますが、さすがに、われわれは生まれる前に魂が存在していたということには納得していると思います。ただ、われわれが死んだ後にも魂が存続するかという点については、彼は納得しているかどうかは分かりません。事実、私もその点については、納得しきれっていません。ひょっとしたら死ぬと同時に魂も散り散りになって消え去ってしまうのではないかという不安や恐れがまだあります。魂がどこか他のところで生まれ、そこからやってきて肉体に宿ることは認めるとしても、それと魂が死後も存続し続けることとは直接関わりがなく、魂は滅ぶものだと考えても何の差支えもないように思えます」

今度はケベスが話し始めた。

(ケベス) :

「君の言うことはもっともだ。生まれる以前に魂が存在したということは、私の証明してほしいことの半分にすぎない。死後も生まれる前と同様に魂が存続するといいうことが証明できてこそ、このことの証明は完成すると考える」

(ソクラテス) :

「人間は生まれる以前に魂として存在し、そこで認識したことを生まれた以降に思い出すのだということと、生者は死者から生まれると先に証明したことを結びつけるなら、死後魂が存続するということは実はもう十分証明されていることなのだ。なぜなら、生まれる前に魂が存在し、その魂は、死者からしか生じないなら、死後魂が存続することは必然なことだと思う。ただ二人はこの議論をもっと徹底的に行いたいなのだろう。そしてまるで子供のように、嵐の日に死んだら、魂は散り散りになってしまうのではないかということをおそれているのだよね」

(ケベス) :

「是非、死をまるで子どものように恐れているわれわれをどうか説得してください。あなたは間もなくここを去られます。今後このような恐怖を誰がわれわれから追い払ってくれるのでしょうか」

(ソクラテス) :

「ギリシャは広い。優れた人間を捜してその答えを求め続けてくれ。そのためにはどんな苦労も金銭も惜しんではならない。ただ君たち以上にこのことに精通している人を捜すのは、かなり大変なことだと思うよ。さて、魂が散り散りになることを不安に思っているみたいだが、この散り散りになるという状況はどのようなものにふさわしいのか、何ゆえこの散り散りになることを恐れるのか、どのようになれば恐れる必要がなくなるのか。そして魂がそのどちらに属するのかを考察しなければならない。それが分かってから恐れるなり、安心するなりしたらいい」

(ケベス) :

「はい、そうします」

(ソクラテス) :

「さて、合成されてできたものは、分解されるのかふさわしいが、合成されてできたものでないものは、分解されるということはふさわしくないのではないか」

(ケベス) :

「はい、そうだと思います」

(ソクラテス) :

「それでは常に自己同一性を保ち、いつも同じようにあるものが非合成的なものであり、そのあり方を変え自己同一性を保たないものが合成的であると言えるな」

(ケベス) :

「はい、私にはそう思われます」

(ソクラテス) :

「それなら前にあげた「等しさそのもの」「美そのもの」のような実在そのものは、単一のものであり、それ自身だけであるものであるから、いかなる時も自己同一性を保ち、変化など受け入れるものではないね」

(ケベス) :

「はい、変化することなどありません」

(ソクラテス) :

「それでは「美しい人間」とか「美しい馬」とか、「同じような木材」とか「同じような石材」とかは自己同一性を保つのか。いつも同じ状態を保ち続けるのか」

(ケベス) :

「いいえ、決して保ちません」

(ソクラテス) :

「ところで、こういう事物は目で見たり手で触れたりできるが、自己同一性を保つ「美そのもの」などは思惟の働きでとらえられるだけで見たり、聞いたり感覚でとらえることはできないな」

(ケベス) :

「あなたのおっしゃるとおりです」

(ソクラテス) :

「それでは、よければ存在するものを2つに分けよう。一種類は目に見えるもの、もう一種類は目に見えないものに」

(ケベス) :

「はい、分けましょう」

(ソクラテス) :

「そして目にみえないものは常に同一のあり方を保つものであり、目に見えるものは決して同一のあり方を保たないものであると分けよう」

(ケベス) :

「その点もそう決めましょう」

(ソクラテス) :

「それでは、われわれの一部分は肉体で他の部分は魂だな」

(ケベス) :

「そうです」

(ソクラテス) :

「では、肉体は今われわれがあげた分類のどちらにより近いと思うか」

(ケベス) :

「目に見えるものにより近いと万人が認めるでしょう」

(ソクラテス) :

「では、魂はどうか。目に見えるものか、それとも見えないものか」

(ケベス) :

「少なくとも、人間には見ることはできません。見えないものです」

(ソクラテス) :

「それなら、魂は不可視だね」

(ケベス) :

「はい、そうです」

(ソクラテス) :

「それなら、魂は肉体より不可視なものにより近く、肉体は目に見えるものにより近いのだな」

(ケベス) :

「まったく、そうでなければなりません」

(ソクラテス) :

「ところで、われわれは魂が何かを考察する時、視覚、あるいは聴覚という肉体の器官をとうして考察する。その時、魂は肉体によって同一のあり方を保たないものの方へ引きずりこまれて、魂はめまいを覚え、酔ったようになるっていいのではないかな」

(ケベス) :

「はい、そうです」

(ソクラテス) :

「だが、魂が自分自身だけで考察する時には、魂は純粹で永遠で常に同一のあり方にあるものだ

けの世界に赴くのである。そしてそこで常に変わらないものに関わり、さまよいのを止めて、いつも恒常的な魂の姿を保つのである。魂のこの状態こそが知恵なのであるのではないか」

(ケベス) :

「私も、それには納得します」

(ソクラテス) :

「では、以上のことから考えると魂は、常に同じようにあるものか、あるいは絶えず変わるもののどちらに近いか」

(ケベス) :

「誰が考えても今までの会話から判断すれば、魂は常に同じようにあるものに近いと結論づけるに違いありません」

(ソクラテス) :

「では、肉体はどうなるのか」

(ケベス) :

「もう一方の絶えず変化するものに近いと結論づけます」

(ソクラテス) :

「また、魂と肉体が一人の人間のうちにある時、自然は、魂は支配する主人であることを、また、肉体は奉仕し仕える奴隷であることを命ずるのだ。このことからどちらが神的なものに似ていて、どちらが死すべきものに似ていると思うかい。神的なものとは、支配し導くもので、死すべきものとは、支配され奉仕するものとは思わないかい」

(ケベス) :

「そのように思います」

(ソクラテス) :

「それでは、魂はどちらに似ているのかい」

(ケベス) :

「もちろん、明らかに、魂は神的なものに、肉体は死すべきものに似ています」

(ソクラテス) :

「それでは、魂とは神的で不死で単一の形相をもち、分解されず常に同一なものであるものに最も似ていて、肉体とは人間的で可死的で多様な形をもち、無思慮で分解可能で常に同一ではないものに最も似ていると言っているのではないか」

(ケベス) :

「はい、そう言わざるをえません」

(ソクラテス) :

「それであれば、肉体は速やかに解体されることが、魂は解体されえないことが、またはそれに近いことが最もふさわしいことではないのか」

(ケベス) :

「はい、そうではないとは私には思えません」

(ソクラテス) :

「目に見える肉体とは、人が死ねば分解し雲散霧消するものである。しかし、現実にはすぐそのようになるのではなく長い間、徐々にかたちを変えていくとはいえど残っていく。仮にミイラ化でもされようものなら何百年もこの世にかたちとして残り続ける。さらに骨などは、まるで不死であるかのようにさらに残り続ける」

(ケベス) :

「はい、そうです」

(ソクラテス) :

「それなのに、目に見えない、高貴で純粋で神々のもとに行く魂が、肉体と離ればたちまち吹き飛ばされて滅びてしまうのか。いや違うであろう。魂が純粋なかたちで肉体から離れたら、魂は肉体的要素を引きずることなく存続するのだ。肉体を避け自分自身に集中していた魂は、むしろ平然として肉体から離れるのだ。哲学するとはまさに、死によって魂が肉体から離れる練習をしていたのだ。哲学とは死の練習にほかならないのではないか」

(ケベス) :

「はい、そのとおりです」

(ソクラテス) :

「そのような状況の魂は、神的なもの、不死なるもの、賢いものの方へ行き、恐怖や凶暴や情欲から解放される。そして神々のもとで幸福な時を過ごすのではないか」

(ケベス) :

「そのとおりです」

(ソクラテス) :

「これに反して、魂が浄められずに汚れたまま肉体から解放される場合がある。肉体を愛し、食べたり飲んだり性の快樂におぼれたり、それら以外の肉体的でないものは何一つ真実と思わなかった魂などがそうである。このような魂は、肉眼には見えないもの、しかし哲学によっては把握されるもの、このようなものを逆に憎み避けてきたのである。このような魂が、自分自身となり純粋な姿で解放されるようになると思うかね」

(ケベス) :

「いいえ、思いません」

(ソクラテス) :

「こういう魂は、肉体にあまりにも習熟したため、肉体との交わりが強く、たえず肉体とあり、肉体にとらえられているのだ」

(ケベス) :

「まったくです」

(ソクラテス) :

「魂にとって、肉体的なものは重荷なのである。このような魂は肉体によって目に見える場所に引きずり込まれる。また、このような魂は墓の回りをうろつくのである。これは浄化されることなく肉体から切り離された結果である。墓のまわりに幻影が見られるのはそのためである」

(ケベス) :

「確かに、それはありそうなことです」

(ソクラテス) :

「そしてこのような魂は、善い人間の魂ではなく、卑しい人間の魂である。これらの魂は生前の生活が悪かったので罰を受けるために、このように回りをうろつかされているのである。そして、彼らに付きまとう肉体的な欲望によって再び肉体の中に引き込まれるまでさまよい続けるのである。そしてまた、以前と同じような性格の肉体の中に入り込むのである」

(ケベス) :

「たとえば、それはどのような肉体なのでしょうか」

(ソクラテス) :

「しいて言うなら、大食・好色・酒びたりの人間の魂は、ロバなどの獣の中に入っていくのが似つかわしいとは思わないか」

(ケベス) :

「似つかわしいと思います」

(ソクラテス) :

「また、不正・独裁政治・略奪を行った者の魂は、狼や鷹の中に入っていくのが似つかわしいのではないか」

(ケベス) :

「はい、そうです」

(ソクラテス) :

「その他の人間の魂もそれぞれに似つかわしいところに入っていくね」

(ケベス) :

「はい、そうです」

(ソクラテス) :

「今まであげてきた一般の人たちの中で最も幸福な者たちは、市民の公共の徳を実践してきた人たちではないかね。その徳とは思慮とか正義とかと呼ばれるもので、たとえ、哲学をしなくても習慣や訓練で身に付けられるものだ」

(ケベス) :

「なぜ、彼らが最も幸福なのですか」

(ソクラテス) :

「なぜなら彼らは、ミツバチとかアリのような種族の中に、あるいはまた再び人間の種族の中に生まれ、慎みある品のよい人間となるからだ」

(ケベス) :

「きっと、そうに違いありません」

(ソクラテス) :

「しかし、神々の中に生まれるには哲学をして魂を浄化した者でなければ不可能だ。だから本当の哲学者はすべての肉体的欲望を避けるのだ。それは、破産や貧乏が怖いからでも不名誉や不評判を恐れるからでもない」

(ケベス) :

「彼らにとって金銭や名誉など相応しいものではありません」

(ソクラテス) :

「だから自分の魂にいくらかでも気をかけている人間、肉体の手入れをしながら生きているのではない人は、肉体だけに執着する連中には別れを告げるべきだ。どこへ行くかも分からない連中と同じ道は歩むべきではない。哲学に従い、哲学が導く方向に向かって歩むべきなのである」

(ケベス) :

「そのためには、どのようにすればよいのですか」

(ソクラテス) :

「人の魂は元来、肉体に縛り付けられ、糊付けされている。そのような魂は、肉体をとおしていつも考えることを強いられ、決して魂自身でものを考察しようとしなさい。それゆえ、魂はひどい無知の状態にあるのだ。そのうえ、本人自身が肉体の協力者なので、このことに魂自身は気づけない。この状態を見抜くのが哲学なのである。哲学はこのような魂を引き取って、おだやかに解放しようと努力してくれるのだ。目や耳などの肉体をとおしての考察は偽りに満ちていることを哲学は示してくれる。そして哲学は、肉体から魂が退くように説得し、それ自身であるものを魂自身が肉体を用いず把握するように促すのである。目の前の移り変わるものは真ではないことを悟らせるのである。それゆえ哲学者は、快楽や情欲や恐怖をできる限り抑制するのである。そうしないと最大の悪徳を蒙ることになりかねないからである」

(ケベス) :

「それでは、最大で究極的な悪とは何ですか」

(ソクラテス) :

「魂は激しい快楽や苦痛を与えられると、そのものを与えてくれるものこそが真実と考えるようになってしまう。それは目に見えるものであり真実などではないのだが」

(ケベス) :

「まったくです」

(ソクラテス) :

「この時、魂は最も強く肉体に縛り付けられているのである」

(ケベス) :

「なぜですか」

(ソクラテス) :

「どんな快楽や苦痛でも釘のようなものを持っていて、魂を肉体にくぎ付けにしてしまい、魂を肉体の性質を帯びたものにしてしまう。その結果、魂は肉体の肯定することなら、何でも真実だと思い込むようになってしまう。そのような状況では、魂は肉体に縛り付けられたままでこの世を去らざるをえなくなり、そのままではあの世へは到達できない。その結果、同じような肉体の中にまた落ち込み、神的なもの、純粋なものには決して交わることも、あずかることもできなくなるのである」

(ケベス) :

「あなたの言われることは真実です」

(ソクラテス) :

「このことゆえに、学びを愛する人々は端正で勇敢なのだ。哲学者の魂ならば、今まさに解放されようとしている時、あえて快樂や苦痛に自分の身をまかせ肉体に縛り付けられようとするところがあるであろうか。いや、彼らの魂は平安を獲得し、真なるもの、神的のものを観想するような状況にあり続けようとする。そして死後には神的なもののもとに到着し人間的な悪から解放されるのだ。魂が正しく育まれていれば、何も恐れることはないのだ。そのような魂は、肉体から分離されるのに際して、引き裂かれ、雲散霧消するようなことはないのだ」

しばらく沈黙が続いたが、シミアスとケベスは小声で何かを話始めた。

(ソクラテス) :

「さっきからケベス君とシミアス君は何か話をしているようだが、今までの議論に、もし、まだ不十分な部分があれば私に言ってくれ」

(シミアス) :

「実はあるのですが、こんな時にあなたに尋ねるべきことか、不愉快な思いをされるのではないかと二人で案じていたのです」

(ソクラテス) :

「君たちはまだぼくが今不幸だと感じていると思っているのかい。君たちさえそう思っているとしたら、人を説得するのはむずかしいことだとあらためて思われるよ。白鳥は死ぬ前に美しく鳴くと言われているが、それは死の意味を知っているからなのだ。決して死をなげいているわけではない。神のもとへ行く喜びの声をあげているのだ。ところが人間は死を恐れているから、その苦痛から叫ぶのだというが、白鳥は寒さに凍えたりしそうな時に決して歌うことなどないのだ。私も白鳥と同じような気持ちだからどうぞ遠慮しないで聞きたいことがあれば聞いてくれ」

(シミアス) :

「ありがとうございます。それなら話をさせてください。確かにこの種の話についてはこの世で明確な知識をえることは不可能に近いと思います。ただ、だからといって放棄することは、人間としてあるべきではないことと考えます。いろいろな方法を駆使して指針を見つけねばならないと思います。あとで、後悔することのないようにしていきます」

(ソクラテス) :

「じゃあ、具体的に話を進めてくれ」

(シミアス) :

「豎琴からかなでられる和音は、非物質的で美しく神的なものです。一方、豎琴は物体で合成物で土の性質をもち死すべきものの仲間です。ところが誰かがその豎琴をバラバラに壊してしまうとしましょう。すると豎琴は死すべきものであるのに残骸は依然として残っています。それなのに、不死なはずの和音は失われてしまいます。いや和音は依然としてどこかに存在しているはずだ、そして死すべき豎琴は、魂が何かを蒙る前に腐って完全に無となるはずだとおっしゃるでしょう。肉体は熱・冷、乾・湿などの相反するものの緊張状態に置かれながらもバランスを保っています。われわれは、魂とは肉体のこれら諸要素を調和させて秩序だてているものではないかと思っています。だから肉体がバラバラになった時、魂も失われるのではないですか。魂が失われたあとも身体の残骸はしばらく残りつづけるのです。このような主張はおかしいでしょうか」

(ソクラテス) :

「シミアス君の言うことは正しいように見える。このことを考察する前に、ケベス君が疑問に思っていることも聞いてみよう。そして両者をともに再度考察してみようではないか」

(ケベス) :

「私は、人間の魂がこの世に肉体をもって生まれ出る以前に存在したということは、十分証明されたとして異存はありません。ただ、死後にもその魂が存在し続けるかどうかについては未だ疑問が残っています。ただ、シミアスが言うように魂は肉体より強くもなく、長生きもできないとは思っていません。魂はこれらすべての点において、肉体を凌駕していると私は思います。それなら、人間の死後肉体の残骸が長期間残る以上、魂が、それがなくなる以前に消えてしまうことなどあり得ないと言われると思います。しかし、それなら、ある機織りの老人が死んだとき、彼が生前織った衣服は滅亡せずに残っているから、機織りもどこかで元気にしているということになります。なぜなら、機織りの種族と彼らによって織られた衣服のどちらが長命なのかと問われたら前者と答えざるを得ないからです。たしかにこの機織りは今まで何着もの衣服を作っては着つぶし、また作っては着つぶしてきたのです。そして最後の一着より先に滅び去ったのです。人間が衣服よりまさり、強いことは当然だと思えます。このことは人間と肉体についても言えることではないかと思えます。人間の魂は、いくつもの肉体を着つぶしてきたのです。一つ一つの肉体よりはるかに長い間魂は存続し続けてきたのです。仮に偶然最後の肉体より先に魂が消えたとしても魂が肉体より短命だということにはならないでしょう。しかし、このことが魂が肉体の死後にもどこかに存在するという確証にはならないと考えます。魂が何度も肉体の衣を変えるうちにしだいに衰弱していき、ついには今回が最後で滅びてしまうということがないと言えるのでしょうか。もし、魂の不死が証明できないなら、われわれは死を恐れなければならないのではないですか」

(エケクラテス) :

「パイドン、ソクラテスの力強い話を聞いて、魂の不死に確信が持てそうだったのですが、シミアスの魂は和音の調和のようなものではないかという話によって、以前の自分の考えを思いだし、魂の不滅の確信がまたゆらいできました。どうか、その後ソクラテスが話されたことを、その様子も含めて、すべて話してはいただけませんか」

(パイドン) :

「あの時のソクラテスはいつにもましてわれわれの議論を喜び楽しんでおられました。その議論によってわれわれ一人ひとりがどのような精神状態になったかも見抜かれていましたし、われわれが議論の中でとまどうと見事に元の議論に引き戻し、考察の手助けをしてくださったのです」

(エケクラテス) :

「いったい、どのようにしてですか」

(パイドン) :

「それではお話ししましょう。あの方は、私の髪をなでながら次のように言われたのです」

(ソクラテス) :

「明日になれば、パイドン君、君はこの美しい髪の毛を切ることになるだろうね」

(パイドン) :

「多分、そうなることでしょう」

(ソクラテス) :

「だが、ぼくの言うことに従えば、そうはならないよ」

(パイドン) :

「それでは、何をしろとおっしゃるのですか」

(ソクラテス) :

「もし、この魂が不滅だという議論にわれわれが確証を示せなくなると、議論を発展させることができなくなったら、ぼくも君も今ここで髪の毛を切らなければならないだろう。そして君は、シミアス君とケベス君にこの議論で勝利するまでは、その髪を伸ばすことはできなくなるだろう」

(パイドン) :

「でも、二人を相手にして私は勝利することができるでしょうか」

(ソクラテス) :

「日の光があるうちは、ぼくを助けに呼べばいい。ただ、あることには絶対襲われないように注意してくれ」

(パイドン) :

「どんなことにでしょう」

(ソクラテス) :

「どんなに議論をしていっても議論ぎらいにだけはならないようにしようということだ。というのは、人間は信頼している人に繰り返し裏切られると人間不信、人間嫌いに陥ってしまう。言論嫌いになることほど人間にとって大きな災難はないと私は考えるからだ。君は、そんなことを考えたことはないかね」

(パイドン) :

「いや、考えていますし、気づいてもいます」

(ソクラテス) :

「言論ぎらいに陥ることは恥ずかしいことだ。人間不信は人間がどのようなものか知らないで付き合うことから生ずるのだ。もし、知っていれば人間とはそのようなものだと判断できたのではないか。第一、人間のなかで、悪人とか善人はわずかで、ほとんどが中間のどちらでもない人間のはずだ」

(パイドン) :

「それは、どういう意味でしょう」

(ソクラテス) :

「人間にせよ動物にせよ、極端に小さいものや大きい物を見つけ出すことはまれなことだ。また、極端に速いもの、遅いもの、美しいもの、醜いものについても同じだ。つまり、極端の先端にあるものはまれで、中間にあるものは豊富で多数だということだ」

(パイドン) :

「もちろん、そうです」

(ソクラテス) :

「では、もし、悪を競う大会があったら、1位になるのは少数であるね」

(パイドン) :

「おそらく、そうですね」

(ソクラテス) :

「しかし、言論においては多少事情が違う。悪にあたるものはいくらでもある。それゆえ、ある人がある言論を真実だと信じ込み、しばらくして偽りであったと思うようになったとする。そして再び他の言論を真実と思う。そしてまた誤りだと知る。このようなことを繰り返していたら最後には自分は最高の賢者になったつもりになるのだ。事物には確実なものなど存在しないのにもかかわらずだ」

(パイドン) :

「そのとおりです」

(ソクラテス) :

「このような心のありようは嘆かわしくないか。この世には確かな言論が存在し、それを理解することもできるのに、時には真実に思え、時にはそうでない言論に出会ってきたがために、自分の責任に帰さず、言論自体に責任を押し付けて喜び、あげくのはては言論を憎むようになり真理から遠ざかっていくとすれば、いったいどうなのか」

(パイドン) :

「本当に、なげかわしいことです」

(ソクラテス) :

「それでは、そのようにならないように気を付けよう。言論に真実などはないということを思い込まないようにしよう。まず自分が十分な知識を持っていないことを自覚し、努力しようとしなければならない。ぼくは何も君たちに私の理論に同調してほしいなどとは思っていない。私の考えを押し付けようなどの思いはない。ただ自分自身が納得したいだけだ。もし、死者にとって虚無だけが待ち受けているのみだと私が信じていれば、間もなく死を迎える私は、嘆き悲しんで周囲の君たちを不快にさせたり、迷惑をかけたりするだけだと思うからだ。魂の不滅の信念がゆるがないことが、君たちにとっても良いことだと思うからだ。ともかく、シミアス君とケベス君もこれからの議論は、なんの遠慮もすることなく、真理と思われれば同意し、そうでないと思えば反論してくれ。

それでは、話を進めよう。シミアス君が言いたかったのは、魂は肉体よりも神的で美しいものだが、調和の一種であるなら、肉体より先に滅びてしまうのではないかという懸念だったな。そしてケベス君が心配しているのは、魂はいくつもの肉体を着つづし、確かに肉体より長く存続し続けるが、ついには最後の肉体をあとに残して滅んでしまうのではないか。これこそが魂の死ではないのかということだったな」

(シミアス・ケベス) :

「そのとおりです」

(ソクラテス) :

「それでは君たちは、先ほどの議論の全部を受け入れないのかい。それとも一部は受け入れるの

かい」

(シミアス・ケベス) :

「あるものは受け入れますが、受け入れられない部分もあります」

(ソクラテス) :

「それでは先ほど述べた、学習とは思い出すことで、そうであればわれわれの魂は肉体にしばりつけられる以前にどこか他の所に必ず存在したはずだと言ったことに対してはどうなのかね」

(シミアス・ケベス) :

「その点については完全に納得しています」

(ソクラテス) :

「シミアス君、君は、魂は肉体から合成された一種の調和だと言ったね。それなら、魂が存在する以前に肉体は存在していなければならないことになるのではないか」

(シミアス) :

「そういうことになります。私の話はつじつまがあっていないことになります。私は、魂が調和であるという言葉聞いた時、何となくその議論の美しさに引かれて、取り入れてしまいました。しかし、それは何ら証明されたようなことではありません。すっかりだまされていたのです。魂は調和などでないことに気づきました。」

(ソクラテス) :

「では、シミアス君、ここで考えてみよう。調和にせよ、その他一切の合成されたものにせよ、それらは、それを合成しているもののあり方とは違ったあり方をするということがふさわしいだろうか」

(シミアス) :

「いいえ、ふさわしくありません」

(ソクラテス) :

「また、その合成されたものが、何かを為したり為されたりする場合、それを合成したものがなしたりなされたりするのと全く関わりのない別のものをなしたりなされたりすることはないということだね」

(シミアス) :

「はい」

(ソクラテス) :

「それなら、調和とはそれを合成し、生み出したものを指導するのではなく、それらに追随するというのがふさわしいことになるね」

(シミアス) :

「はい」

(ソクラテス) :

「そうすると、調和がそれを生み出したものと反対の運動をしたり、反対の音を出したりなど、反対のことをすることはありえないな」

(シミアス) :

「はい、ありません」

(ソクラテス) :

「では、調和とは本来どのように調和づけられたかという仕方に従っての調和だな」

(シミアス) :

「意味がよくわかりません」

(ソクラテス) :

「では、聞き方を変えよう。より多く調和づけられれば、より多くの調和が生じ、より少なく調和づけられればより少ない調和が生ずるのかね」

(シミアス) :

「はい、そのとおりです」

(ソクラテス) :

「このことは魂にもあてはまるかい。ある魂がより多く魂であり、ある魂はより少なく魂であるというようなことがあるかい」

(シミアス) :

「ありえないと考えます」

(ソクラテス) :

「さてそれでは、ある魂は思慮や徳をそなえて善いものであり、ある魂は無思慮で悪徳をそなえ悪い魂とされる。このようなことはあるのか」

(シミアス) :

「あると思います」

(ソクラテス) :

「では、魂が調和であると主張する人は、魂の中にある徳や悪徳を何というのであろうか。これは別の調和・不調和をいうのであろうか。善い魂は、調和の状態の中に別のある調和をもち、悪い魂は不調和の状態の中に別のある調和自体を持っていないのであろうか」

(シミアス) :

「私には、何とも答えることができません。しかし、魂が調和であるという人は、何かそのようなことを言うと思われれます」

(ソクラテス) :

「しかし先ほど、魂はある魂より、より多く魂であったり、より少なく魂であることはないことを確認したはずだ。それからすれば、ある魂が別の魂よりより多く調和であったり、より少なく調和であったりすることなどないはずだな」

(シミアス) :

「そうです」

(ソクラテス) :

「つまり、魂に調和において違いがないなら、より多く調和づけられることもより少なく調和づけられることもないのではないか」

(シミアス) :

「はいそうです」

(ソクラテス) :

「ということは、魂はより多くの調和を分け持つとか、より少ない調和を分け持つということがあるだろうか」

(シミ阿斯) :

「いいえ、ありません」

(ソクラテス) :

「つまり魂は調和づけられているという点では、どんな魂にも差はないということだな」

(シミ阿斯) :

「はい、そうです」

(ソクラテス) :

「魂がそうであるなら、悪徳が不調和で調和が徳である以上、魂によって悪徳をより多くもったり、徳をより多く分け持ったりすることがあるであろうか」

(シミ阿斯) :

「いいえ、ありません」

(ソクラテス) :

「いや、むしろ魂は調和である以上悪を受け持つこと、不調和を分け持つことはないのではないか」

(シミ阿斯) :

「たしかに、ありえませんが」

(ソクラテス) :

「魂は、悪徳を分け持つことなどないということになるな」

(シミ阿斯) :

「はい、どうしてもそういうことになります」

(ソクラテス) :

「すべての動物のすべての魂は同じように善いものだ。魂とはすべて同じ程度のものであるということになるな」

(シミ阿斯) :

「はい」

(ソクラテス) :

「魂が調和であると言うことを前提にすれば、このような論理となってしまうが、どうだろうか」

(シミ阿斯) :

「最初の前提が正しいとは思えなくなりました」

(ソクラテス) :

「ところで、人間を支配するものとして魂以外をあげることができるかい」

(シミ阿斯) :

「いいえ、できません」

(ソクラテス) :

「魂が肉体を支配しようとする時は、魂は肉体が欲する状態とは反対の方向に肉体を導こうとするのではないかな」

(シミラス) :

「はい、そのとおりです」

(ソクラテス) :

「先の議論からすれば、魂が調和なら、豎琴の音色が豎琴に従うように、魂も肉体と反対の行動をとることなどできないことになるのではないか。調和しているということは、これらの要素に追随するという事ではないか。つまり、肉体が欲する方向に従うという意味だ」

(シミラス) :

「そういうことになります」

(ソクラテス) :

「魂とは、肉体に対して命令を下し反対をし、支配し、ある場合には鍛錬し厳しく痛い目にも合わせ、ある時にはもっと穏やかに脅かしたり戒めたりしながら、欲望や怒り、恐怖に対して対処させるのではないか。逆に、魂が肉体に引きずり回されるとでもいうのか」

(シミラス) :

「いいえ、魂が肉体を拘束します」

(ソクラテス) :

「魂が調和であるとはもはや言えないな」

(シミラス) :

「はい、そのとおりです」

次に、ケベスに問いかけ始めた。

(ソクラテス) :

「ケヘス君は今、魂の不滅が証明されることを要求している。魂が不滅でないとしたら、哲学者の死に対する確信など愚かなものになってしまう。また、魂がわれわれ人間の中に入り込む以前にどこかに存在していたということが証明できても、それが魂の不滅を証明したことにはならない。確かに魂は長命かもしれないが、肉体に宿り疲弊していつかは死んでいく。あるいはこの肉体に入り込んだがために、滅亡への始まりとなったことだって考えられなくもない。そして魂はこの人生をみじめに過ごし、最後に滅亡する。そのように考えていると言って間違いはないかね」

(ケベス) :

「はい、間違いありません」

(ソクラテス) :

「ただ、この問題に答えを出すのはひじょうに困難なことなのだ。そのためには、まず、生成と

消滅について徹底して論究しなければならないが、よろしいかな。そしてその後その結論を活用して君の疑問についての答えに役立てていければ使っていこう」

(ケベス) :

「はい、結構です」

(ソクラテス) :

「ぼくは若いころから事物がなぜ生じ、なぜ滅び、なぜ存在するのかを考えてきた。たとえば、人間の思考は血液によるのか、空気によるのか、脳が視覚や聴覚をとおして得たものから生まれるのか考えてみるがよく分からない。一方、人間が成長するのは、食物をとることによって肉に肉が付け加わり、骨に骨が付け加わることによるのだと当然のこととして理解してきた」

(ケベス) :

「はい、私も当然そのように思います」

(ソクラテス) :

「ではさらに考えていこう。大と小を比較する場合を考えてくれ。大きい人と小さい人を比べれば明らかに頭の差だけ大きいだから大きいのだと考えてきた。大きい馬と小さい馬にしても同じである。10より8が小さい。なぜなら10になるためには2足さなければならないからだ。2尺は1尺より大きいのは、自分自身の半分によって1尺より超過しているからである。これらは当然のことだと考えていた」

(ケベス) :

「私もそうだと思いますが、それなら今あなたは、どのように考えておられるのですか」

(ソクラテス) :

「考えれば考えるほど、なぜそう言えるのかわからなくなってきたのだ。たとえば、誰かが1に1を加えたとする2になることはだれにも分かる。しかし、元からあった1が2になったのか、つけ加えた1が2になったのか、あるいは一方が他方に付加されることにより2になったのか、わたしには説明することができない。これらは、お互いに離れて存在していた時には、それぞれ1であったが、近くにおかれることによって2になる原因が生まれたということも私には不可解だ。逆に1が分かれて2になることも分からない。先ほどは寄せ集めることが2になる原因であったのに、今度は引き離すことが2が生ずる原因であるからだ。そもそも1が生ずるということはなぜなのかさえも知らない。その時私は、自然科学的な考察はやめようと思ったのだ。そのような時、私はある人が万物を秩序付け万物の原因となっているものは理性であると言っているのを知った。もし、理性が秩序付けていることが正しいとしたら、それはすばらしいことであると思った。そして理性による秩序づけは、すべてを全体としても個々のものとしても、最善であるように位置づけているであろうと考えた。だから、もしそのものの滅びや存在の原因を知りたいなら、そのものがどのような仕方存在するのが、あるいは影響を蒙ったり、なしたりするのが最善かを発見しなければならない。つまるところ、人間にとっても、事物にとっても何が最上、最善かを知ることがその答えに到達する道ではないか考えるようになったのだ。そして、私はそれを私に教えた人間を師とあおぐことにした。

たとえば、彼は私にまず大地は平たいかまるいかを告げてくれる。そしてそのことの必然性を次

に説明してくれるであろう。大地がこのようにあることがより良いのだと言うように説明するだろう。また、この大地が宇宙の中心にあるなら、そのようにあることが他のあり方より良いのだと言うように説明するであろう。そして私はこれらのことを師が明らかにしてくれるなら、その論理にすべて従うことを心に決めたのだ。太陽や月の運行についても、星々のことについても、すべて理性により秩序付けられ、現在あることが最善のようにあるといえる。そこで、さらにいろいろなことを知りたいと思い、彼の書物を手に入れて読んだ。

ところが、実際は彼はその原因を理性に帰してはいなかった。たとえば、事物の原因を水とか空気など見当違いのものに帰していた。私が今ここに座っているのは、理性によってなされていると言いながら、いざ説明となると、関節の腱でつながれた骨、そしてそれにつながった肉さらにそれを包む皮膚が作用して、折り曲げた足と臀部を使用して、のようにその原因を説明しているだけだったのである。私はがっかりした。

しかし、私はそのことによりまた目を開かされた。今私がここに座っているのは、有罪の判決がくだされたこと、そしてそれに従うことが善いことだと私が判断したこと。脱走をすすめられてもここにとどまることが正しいと考えたことが原因なのであり、筋肉や腱などとは何の関係もない。おまえは体があるからここに座っていられると言われても、体があることが座る原因であるとするならそれはおかしい話なのでということに改めて気が付いた。彼らには真実の原因と単なる理由の区別がついていのだ。私は真の原因を求めて更なる考察を行っていかうと考えた。そのためならどんなことでもなすつもりだ」

(ケベス) :

「はい、私もそれについていきます」

(ソクラテス) :

「それからというものの、私はいろいろなことを考えた。たとえば、太陽を観察するのに肉眼で直接見ると目をいためてしまう。そのように事物を感覚で見ると人間は盲目になってしまうのではないかと考えた。そこで、言語をとおして事物の真理を考察することにした。ただこれが最上の方法だと納得しているわけではない。ともかく私は、言語を前提としてこれに整合するものを真とし、整合しないものを真ではないとすることにした」

(ケベス) :

「もう少し分かりやすく説明していただきたいのですが」

(ソクラテス) :

「まず、ぼくが前提としているのは、美それ自体、善それ自体、大それ自体、いやすべてのものに、それ自体のそのものが存在するということだ。このことに君が賛同してくれれば話が進められるのだがいかがかな。そのうえで魂が不死であることを君に示すことができるようになると思うのだが」

(ケベス) :

「どうか、そのことについては、私が賛同したものとして話を進めてください」

(ソクラテス) :

「たとえば「美そのもの」以外に何か美しいものがあるとするなら、それは、「美そのもの」を

分有するから美しいということに君は同意するかい」

(ケベス) :

「同意します」

(ソクラテス) :

「ある人があるものが美しいと感じるのは、それが輝かしい色を持っているからだとか、形とかを理由としてあげても私は違うと言う。それが美しいのは「美そのもの」を分有しているからだ」と主張する。ただそのようにだけ考えるようにしているのだが、君はどう思うかい」

(ケベス) :

「私もそのように思います」

(ソクラテス) :

「つまり、「大そのもの」によって大きいものは大きく、「小そのもの」によって小さいものは小さいのだな」

(ケベス) :

「そうです」

(ソクラテス) :

「では、ある人が、他の人より頭一つによって大きいとか、小さいとか誰かが言っても君は受け入れないだろうね。あるものが他より大きいのは「大」により、小さいのは「小」によるからだよな。ただ、あるものが頭一つだけ大きいとすると、頭というより小さなものが原因となって大きくなったということになるが、それはどういうことかと誰かに問われたら困るのではないかい」

(ケベス) :

「はい、答えに窮します」

(ソクラテス) :

「つまり、10が8より大きいのは2が原因であるということは、10は「大」により大きいはずなのに、2という「小」により大きくなってしまったことになる」

(ケベス) :

「はい、困ります」

(ソクラテス) :

「その時君は、各々の事物は、そのものが分有する性質によって生ずると宣言するのではないか。つまり、2は1に1が加わることによって生ずるのではなく、2という本質を分有することによって生ずる。また、2が1になるのは2から1が離れていくのが原因ではなく、1という本質を分有しているからだというふうにね」

(パイドン) :

「とりあえず、そのように話されたのです」

(エケクラテス) :

「どんな人にもあの方は分かりやすく説明されますね。そのあとどうなったかをさらに聞かせて

ください」

(ソクラテス) :

「さて、シミアス君はソクラテスより大きい、パイドン君より小さいと君が言うなら、シミアス君の中には、「大」と「小」の両方の要素があることになるのではないのかな」

(ケベス) :

「はい、そうなると思います」

(ソクラテス) :

「ただ、シミアス君が本性的にソクラテスを凌駕しているのではない。シミアス君がたまたま持つにいたった「大」によって凌駕しているのである。またソクラテスが、たまたま、シミアス君の「大」に対して「小」持っていたからであるのではないか」

(ケベス) :

「そうです」

(ソクラテス) :

「そして、シミアス君がパイドン君に凌駕されるのもパイドン君がたまたまシミアス君の「小」に対して「大」を持つからではないのか」

(ケベス) :

「はい、そのとおりです」

(ソクラテス) :

「つまり、シミアス君は両者の中間にあって、小さくもあり大きくもあるのだ。パイドン君の「大」に対しては、自分の「小」を出し、ソクラテスに対してはその「小」を凌駕する「大」を出すのだ。そうではないかね」

(ケベス) :

「はい、そうです」

(ソクラテス) :

「そして、「大」の本性は「小」の本性を受け入れないし、「小」の本性は決して「大」の本性を受け入れようとはしないように思う。「大」に「小」が迫ってくれば、「大」は逃げて場所をゆずるか、滅びてしまうかなのである。自分が「小」になることなど決して好まないのである。同じように「小」も「大」になることを望みはしないのである」

(ケベス) :

「そのとおりです」

(傍聴者A) :

「え、今までの話からすれば、小から大が生じ、大から小が生じるのではありませんでしたか」

(ソクラテス) :

「よく思い出させてくれた。しかし、あの時と今の状況とは違う。ある事物からそれと反対の性格を持つ事物が生ずるのは当然だが、ある本性から反対の本性が生み出されることは決してないのだよ。あの時は事物を言っていたのである。本性自体が反対のものを生み出すことは決してな

いのだ。ケベス君、どうかね」

(ケベス) :

「はい、このことは納得しましたが、その他に気になることは多少あります」

(ソクラテス) :

「ある性格は、決して反対の性格にはなろうとしないことは納得しているな」

(ケベス) :

「はい、そのことに異存はありません」

(ソクラテス) :

「それでは、君は何かを「熱」と呼び、なにかを「冷」と呼ぶことに同意してくれるかい」

(ケベス) :

「はい、同意します」

(ソクラテス) :

「それでは、それは火や雪と同じものかい」

(ケベス) :

「いいえ、違うものです」

(ソクラテス) :

「つまり、「熱」は火とは異なる何かであり、「冷」は雪とは異なる何かだね」

(ケベス) :

「はい、そうです」

(ソクラテス) :

「たとえば、雪が「熱」を受け入れて雪でありつつ熱いなどということはない。「熱」が近づけば雪は「熱」に場所をゆずって退却するか滅ぶであろう」

(ケベス) :

「そのとおりです」

(ソクラテス) :

「同じように、火も「冷」が近づけば、それに場所をゆずって退却するか、滅ぶしかないよな」

(ケベス) :

「おっしゃるとおりです」

(ソクラテス) :

「本質そのものは当然その本質の呼び名を要求するが、本質そのものではないが、存在する限りその本質を常に有するものも同じ本質の名称を要求することがあるな。つまり奇数は当然奇数と呼ばれるが、3という数字は3とも呼ばれるが、奇数とも呼ばれるということだな。そして4という数字は偶数そのものではないが、4とも呼ばれるが偶数ともよばれるのだな」

(ケベス) :

「はい、そうです」

(ソクラテス) :

「そして本質そのものは、反対の本質を受け入れないが、その本質を自分の中に持つものも他の

反対の本質を自分の中に持つものを受け入れようとはしないない。つまり、3という数字は4とは反対ではないのに、奇数という本質を持つがゆえに、偶数という本質を持つ4を受け入れようとはしないのだな」

(ケベス) :

「はいそうです」

(ソクラテス) :

「ではケベス君、本質があるものを占拠すると、その本質はその事物に自分の本質を保持することを強いるのではないか」

(ケベス) :

「え、それはどういう意味ですか」

(ソクラテス) :

「3の本質がある事物を占めると、その事物は3であるだけでなく必然的に奇数という本質を帯びることにもなるよな」

(ケベス) :

「はい、たしかに」

(ソクラテス) :

「そこでこのような事物に、それとは反対の本質は近づけないよな」

(ケベス) :

「はい、近づけません」

(ソクラテス) :

「3を3たらしめている本性は奇数性だね。そしてその反対なのは偶数性だね」

(ケベス) :

「はい、そうです」

(ソクラテス) :

「そうすると、3に対して偶数の本質は決して近づかないだろう」

(ケベス) :

「確かに、決して」

(ソクラテス) :

「つまり3自体は、偶数とは反対のものではないが、奇数性を帯びているがゆえに偶数性は近づかないのだ、つまり3自体と偶数性とは関わりがないのにね」

(ケベス) :

「はい、関わりがありません」

(ソクラテス) :

「それなら、3は非偶数的なものだということになるな」

(ケベス) :

「そうです」

(ソクラテス) :

「3自体は偶数とは反対ではないが、常に奇数性を帯びているから、偶数は近づけない。同様の事は2には奇数が、火には冷たさが近づけないのと同じだ。つまり、反対の本質どうしが相手を受け付けただけではない。反対の本質を帯びた事物同士も相手を受け付けないのだ。2倍という概念は、半分というものに対する反対のものだが、偶数性を帯びているので、奇数は受け付けられないのではないか」

(ケベス) :

「はい、どうか話についていています」

(ソクラテス) :

「それでは話を始めにもどそう。物体のうちに何が生ずれば熱くなるかともし君が私に聞いたなら、「熱が生ずるから」と安全な答えではなく、「火が生ずるから」だと賢く答える、体に何が生ずれば病気になるのかと聞かれれば「病気が生ずるから」とは答えず「発熱」が原因だと答える。さらに数のうち何が生ずれば奇数になるかと聞かれれば「奇数性が生ずれば」とは答えず「1が生ずれば」奇数になると私は答える。この例から言えば、体のうちに何が生じたら人間は生きたものとなるのか」

(ケベス) :

「魂です」

(ソクラテス) :

「ということは魂は何であれ何かを占拠すれば、そのものを生きたものにするのだな」

(ケベス) :

「そうです」

(ソクラテス) :

「ところで生に反対するものとは何かね」

(ケベス) :

「死です」

(ソクラテス) :

「それでは、魂は生とは反対の死は決して受け入れないな」

(ケベス) :

「まったくそうです」

(ソクラテス) :

「それでは、偶数という本質を受け入れないものをわれわれは何と呼んだか」

(ケベス) :

「非偶数的なものです」

(ソクラテス) :

「正義を受け入れないもの、音楽性を受け入れないものは何か」

(ケベス) :

「不正なものであり、非音楽的なものです」

(ソクラテス) :

「それなら、死を受け入れないものをわれわれは何と呼ぶのかね」

(ケベス) :

「不死です」

(ソクラテス) :

「魂は死を受け入れないのではないか」

(ケベス) :

「はい、受け入れません」

(ソクラテス) :

「それなら魂は、不死なものだ」

(ケベス) :

「はい、不死なるものです」

(ソクラテス) :

「これで魂が不死であることが証明されたな」

(ケベス) :

「はい、証明されました」

(ソクラテス) :

「ところでケベス君、もし仮に非偶数的なものが不滅なら、3は不滅であることになるな」

(ケベス) :

「はい、おっしゃる通りです」

(ソクラテス) :

「また、熱くなりえないものが不滅なら、雪は不滅で、雪に熱いものを近づければ、雪は溶かされることなく無事に立ち去るだろうね」

(ケベス) :

「はい」

(ソクラテス) :

「同様に、冷たくなりえないものが不滅であったとしたら、何か冷たいものが火に近づいたら、火は無事にそこを立ち去っていくだろうな」

(ケベス) :

「はい」

(ソクラテス) :

「また同様に、魂に死が近づいても魂は、そこを立ち去ることはあっても滅びることはないな」

(ケベス) :

「そのとおりです」

(ソクラテス) :

「しかし、奇数に偶数が近づいた時、奇数が偶数になることはないが、奇数が滅びて偶数が生じてもなんら差支えがないのではないかという人がいるかもしれない。しかし、今までの議論から、「いや奇数は滅びません」とは言うことができる。なぜなら、非偶数が不滅だからだ」

(ケベス) :

「はい、そうです」

(ソクラテス) :

「不死なものは不滅であるということが同意されるなら、魂は不死であり不滅であることになるが、そうでなければ別の議論が必要となる」

(ケベス) :

「いいえ、不死なものは永遠なので、滅亡などうけいれることはないように思われますが」

(ソクラテス) :

「思うに、神とか生の本質など、不死なものは滅亡などしないな」

(ケベス) :

「はい、そうです」

(ソクラテス) :

「そうすると、人間に死が近づけば、可死的な部分は当然滅ぶが、不死な部分はそこを去り安全なところに立ち去っていくのだな」

(ケベス) :

「はい、そう思われます」

(ソクラテス) :

「魂は不滅で、死後も別の世界で存続しつづけるのだ」

(ケベス) :

「そのとおりだと思いますが、言いたいことがあればこの機会しかもはやないので言うべきだと思いますが、シミアスはどうなのか」

(シミアス) :

「私も、魂の不滅は疑う余地のないことだとは思いますが、人間の弱さからか不安な心は今も残っています」

(ソクラテス) :

「シミアス君の言うことは間違っていない。検討し続けることは大事なことなのだ。アイデアの存在自体の追究も必要だ。そしてそれが明らかになれば不安も消えるのではないか」

(ソクラテス) :

「是非、このことはみんなに言っておきたい。魂が不死であるなら、われわれは生きているこの時のためだけでなく、未来永劫のことを考えて魂の世話をしなければならない。もしそれをないがしろにするなら、恐ろしいほどの悪影響が出るのだ。たとえば、悪人にとって死というものが肉体からそして魂からも解放されるのであれば、悪からも解放され、死は幸せなことである。しかし、魂が不死となると彼らに救済などはなくなるのだ。彼らは善くなるか賢くなる以外に魂が悪から逃れることのできる方法はなくなるのだ。人間が死後持ち歩くのは、教養と生前つちかった性格だけなのだからだ。

ある言い伝えでは、人間は死ぬとその人に割り当てられた導き手に案内されて、ある場所に連れて行かれ、そこで生前の裁きを受ける。さらにあの世に連れて行かれ、そこで蒙るべきことを

蒙り、定められた期間が過ぎれば、またこの世に連れ戻されるという。これは、何度も繰り返されるのである。しかし、そこに至る道は一つではなく、いたるところに分岐がある。ゆえに導き手が必要なのであろう。さて、賢い魂はすすんでその導きに従ってあの世に行くであろうし、そこで出会うものも未知なものではないであろう。一方、この世で肉体に執着した魂は、この世をうろつきまわりさんざん抵抗したうえ、やっとのことで無理やり導き手に決められた場所に連れて行かれることであろう。そして、そのような不浄な魂、悪をまたそれに類するようなことをしてきた魂は、他の魂から避けられる。その魂は途方にくれ、そこにおいてもさまよい続ける。そして、そのような魂は、その時が来ると、それにふさわしい場所に連れて行かれるのである。ところで、大地には多くの驚くべき場所があるのだ。多くの人が思っている性状とは大きく異なっている。私はその話をある人から聞いて、それが正しいと確信している」

(シミアス) :

「それでは、大地の状況について、あなたが聞かれて正しさを確信している話というものを聞かせてもらえますでしょうか」

(ソクラテス) :

「今から言うことが正しいと証明するのは難しいし、またそれには時間が足りない。それでもいいなら、私の信じていることを話すよ」

(シミアス) :

「はい、それで十分です」

(ソクラテス) :

「もし大地が球形で宇宙の中心にあり、宇宙が一様で大地が均衡なら、この大地はどこに落ち込むこともない。一様なものの中心に位置するものは、いかなる方向に傾くこともないだろうからだ」

(シミアス) :

「それは正しい考え方だと思います」

(ソクラテス) :

「そして大地はひじょうに大きなもので、われわれはそのほんの一部に住んでいるにすぎない。ここと似たような場所は多くあり各々のところにいろいろな人が住んでいるのである。天空には星々が運行し、天空も大地も清らかなものであるが、水や空気はこの天空の沈殿物であり、絶えずこの大地のくぼみに流れ込んでいるのである。そしてわれわれは、そのくぼみの中にすんでいるのである。海底の深いところに暮らす生物が、自分はあたかも海上に暮らしていると錯覚しているように、人間も地上に暮らしていると錯覚している。地上とは清らかで、美しいものであることを人間は知らない。空気を天空と呼んで、その中を星々が運行していると思っているのである。しかし、われわれは虚弱であるために、空気の果てるところまで行くことができない。魚が海面から顔を出せば、全く違ったすばらしい世界を目にするのと同じことである。もし、人間の本性がこれを見ることに耐えられるなら、真の天空、真の光を見ることができよう。海中が海上と比べれば、腐食された不完全な粘土の漂う世界であるように、このわれわれが住む大地も天上の真下にあるものに比べれば、とるに足らない劣ったものである。シミアス君、もし

よかったら、この天空の真下の状況を話してあげようと思うのだがいかがなものか」

(シミアス) :

「是非、その物語を聞かせてください」

(ソクラテス) :

「真の大地は、12枚の色とりどりの皮で縫い合わされた、毬のように見えるのだ。われわれの色とりどりの世界は天上界の写しであると言っていい。この色はわれわれが住んでいる世界の色と違い驚くほど美しく、澄み切っている。それが大地に不完全ではあるが、色とりどりの色調を与えているのである。真の大地の樹や花はわれわれの世界のものより、はるかに美しい。山も石も滑らかで透明でより一層美しくある。われわれの世界の宝石は、真の大地の世界のかけらにすぎない。新の大地はすべて宝石でできている。真の大地は、腐敗物や塩分により汚されていない。これらのものがこの地に醜さや病気をもたらすのである。真の大地を見れる人は幸福だ。そこには動物も人間もいる。この地の気候は調和を保っているので病気をすることもない、われわれよりはるかに長生きである。彼らは、視力・聴力・知力においてわれわれよりすぐれている。また、神々と直接交流もでき、太陽や星々をその真の姿でとらえることができる。大地の表面はこのようなものであるが、内部には、いろいろな深さのところに広さは異なる空間が多くある。これらの空間は、まちまちの大きさの通路ですべてつながっている。そしてその通路には水が流れ込んでいる。大地の下には、熱湯と冷水が流れる巨大な川があり、火の川も泥が流れる川もある。これらは、すべてのこの地下世界を満たし、上下左右に流れ込んで流れ出て、循環を続けている。

いろいろの流れがあるが、その中で次の4つの流れが際立っている。一つは最も大きく、最も外側に位置する川で生者と死者を分ける境界となっているものである。そして二つ目に、それと反対方向に流れている川がある。これは幾多の荒涼とした土地を流れるが、この川にはたくさんの死者がやって来て、各々決まった期間そこに留まり、再び生き物として生まれるために送りだされる場所である。三つ目がその中間あたりから流れ始める川で、溶岩のように水と泥が煮えたぎったようなものが流れており、大地の下を何重にもめぐっている。この溶岩流はあちこちでわれわれの住む地にその溶岩を噴出しているのである。四つ目が、恐ろしく荒廃した地に流れ込む川である。この川はこの地に恐怖の湖をつくる。この川は人々から悲嘆の川とも呼ばれている。

大地はだいたいこのようになっている。死者たちは、各々の地にやってくると、まず裁きの庭に連れて行かれ、ほどほどの人生を送ったものは、船に乗せられ普通の地に行きそこに住む。そして各々その善行と悪行に応じて罰や報償を受ける。一方、非合法的な殺人などまたそれに類する許しがたい悪を行った者は、四つの川が流れ込んでできた湖に投げ込まれ、そこから決して脱出することはできなくなるのである。大罪を犯したといえども、その後悔い改めた生活を送ったとか、くむべき事情があった場合などは、一年後にはその川から、違う湖のそばまで流される。そして自分が危害を加えた相手に大声で許しを懇願し、もしそれが認められたらその川から解放され湖に移ることができる。もし、許されなければまたその川に戻るのである。そして、許されるまで永遠にこの苦しきは繰り返されるのである。

一方、敬虔に生きたと判定された者たちは、上方の清々しい住まいに到着しそこに住むようになる。特に哲学により清められた魂は、全く肉体から離脱した生を送り、最も美しい住まいに居住することになる。この場所の状況について話すのは容易でなく、その時間もない。ただ、この世において徳と知恵にあずかるために全力をつくさなければならないことだけは確かだ。あの世は、かくも美しい所だからだ。このような話を確信をもって行うことは、理性的でないと思われるかもしれない。しかし、魂が不死であることは真実だ。このような話に身を託すのも価値があると私は考える。このような話は美しいからだ。そしてこのことを自分に言い聞かせる必要があると思う。あの世への旅立ちを待っている者は、肉体的快樂と関わりのない、善などの徳に熱中すべきである。ぼくはもう旅立つ時が間近なのである」

(クリトン) :

「ソクラテス、われわれに言いつけておくことはないかね。たとえば君の子どもたちのこととか。何でも君の気に入るようにするつもりだよ」

(ソクラテス) :

「いや、別にないよ。君たちは自分自身に配慮した行動をしてくれればいい。それが君たち自身にとっても、ぼくの身内にとっても良いことにつながるからだよ。もし君たちが自分をなおざりにするような行動をとったとするなら、今ここでどんなに多くのことを約束したところで何の役にもたたないよ」

(クリトン) :

「では、あなたのいうとおりに努力しよう。ところで、どのように君を埋葬しようか」

(ソクラテス) :

「どうでも好きなようにしてくれ。ところでクリトンはまだ納得できていないらしい。私をどのように埋葬するかを聞くからね。毒杯を飲んだあとの私の屍は、もはやソクラテスではないのだ。私は、もうそこにはいないで幸福な世界に旅立っているのだ。言葉を正しく使わないとクリトン、君自身の魂に害悪を及ぼすことになるよ。元気を出して、君の思うように埋葬してくれればそれでいいよ」

ソクラテスは沐浴され、3人のお子さんや縁者とも会われ話されたあと、子供たちや縁者を家に帰して、彼は我々のところに戻ってきました。間もなくして刑務官がやって来て、次のように言いました。

(刑務官) :

「あなたは、私が今まで出会った人の中で最も高貴な人だ。何一つ私をののしったり、私に対して怒りをぶっつけることがない。今までどれだけ多くの人が私をこの場で罵倒してきたことでしょう。私が今何を告げに来たのか分かっていることと思います。どうぞ、耐えてください」と言って涙を流し、立ち去っていった。

(ソクラテス) :

「なんとすばらしい男だ。私のために気高い涙を流してくれていることか。クリトン、彼の言い

つけに従おう。毒薬を持ってくるように告げてくれ」

(クリトン) :

「日没までまだ時間はあります。そんなに急ぐことはないのではないですか」

(ソクラテス) :

「ぼくは、少しでもあとにのぼして得をしようなどとは思っていないよ。最後になって笑いものになどなりたくないよ。クリトン、早く持ってきてくれ」

クリトンは、毒薬を持ってくるように指示し、係りの男はすりつぶした毒薬の入った盃を持ってきました。

(ソクラテス) :

「これをどうすればいいのかね」

(係りの男) :

「飲んでから、足が重くなるまで歩き回ってください。それから横になってください。そうすれば、薬が自然に効いてきます」

そのように言うと彼はソクラテスに盃を渡しました。するとソクラテスは全く上機嫌にそれを受け取られました。そしていつもと変わらぬ仕草でその男に言われました。

(ソクラテス) :

「この毒薬の一部をある神に注ぐというのは許されるかね」

(係りの男) :

「いいえ、適量しか盛っておりませんので」

(ソクラテス) :

「わかった。ただ神には祈らせてくれ。どうか私のこの世からあの世への移行が幸運でありますように」

そう言われてソクラテスは盃を口に持って行って、いとも無造作に平然とそれを飲み干されたのです。われわれは皆こらえきれず涙を流し始めました。私は、大事な友を失うことを嘆きました。クリトンは悲しみのあまり外に出ていきました。悲しさのあまり大声を出す人々もいました。

(ソクラテス) :

「なんということだ。こんな醜態を演じはしないかと思ひ女たちを家に送り返したのに。人間は静寂のうちに死ななければならないのだ。どうか我慢してくれ」

われわれはそれを聞いて恥じ入り、泣くのをやめました。あの方はしばらく歩き回られました

。そして、足が重くなったのか、係りの男の言いつけどおり仰向けに横になりました。係りの男は足を押して感じるかどうか聞きましたが、あの方は感じないと答えられました。

(係りの男) :

「こうやって押して行って、冷たくなったところが心臓まで来たときにこの方は、亡くなられているでしょう」

しばらくして、あのかたの体がピクリと動き、亡くなられました。これがソクラテスの最期でした。クリトンがあの方の口と目を閉じてあげられました。これがソクラテス、知恵と正義において最も卓越した人の最期でした。